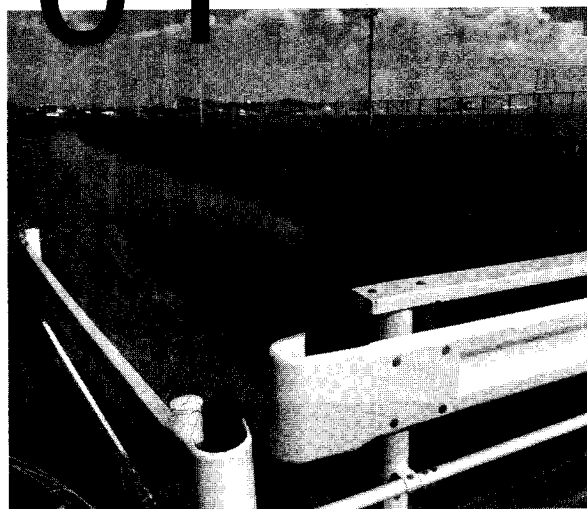


監視社会ニッポン

狙われるDNA編

01



青年がバス釣りをしていた現場。(撮影/ワセダクロニクル)

120万件——この数字、何かわかりますか？警察庁が集めたDNA(デオキシリボ核酸)のデータ数だ。「人体の設計図」といわれる究極の個人情報、日本の総人口の100人に1人、東京都民でいえば57人に1人の割合で捜査機関に保有されている。DNAの採取に関する法律はない。採取する警察側の裁量に委ねられている。私たちの取材で、警察はDNAの採取対象を「微罪」に広げていたことが判明した。DNAの収集に躍起になる警察。その現場でいったい何が起こっているのか。私たちはDNAを採取された人たちを訪ね、話を聞いた。まずはバス釣りをしているDNAを採取された青年の話から。

警察庁が120万件のDNAをデータベース化
法律の歯止めなく裁量で運用

乗用車を運転して、趣味のブラックバス釣りにきていた。

内野さんはリール付きの竿さおを使って、用水路にかかる橋からルアーを投げていた。まだ正月の三日で、他に釣り人はいなかった。

しかし当たりがない。内野さんは用水路の水際まで下りることにした。用水路に沿って設置されている高さ約85センチのガードレールをまたいだ。そして、水際のコンクリートの護岸まで下りた。

それでも釣れない。内野さんがあきらめ、引き揚げようと水際に背を向けたときだった。後ろから声が出た。

「ちょっと待って」

振り向くと、バイクに乗った警官が約8メートル離れた対岸にいた。

「これは逮捕だな」

警官はバイクを対岸に停めたまま、内野さんに近づいてきた。背の高い、若い警官だった。

「入ったらいかんところって、わからなかった？」

「いえ、わかりませんでした」

内野さんは本当に立ち入り禁止とは知らなかった。

用水路には川に沿ってガードレールとフェンスがある。長さ約9メートルのガードレールが途切れると、金網が張られたフェンスが

ここでは、20代のこの青年を「内野翔大」とさんと仮名で記載する。誹謗中傷を防ぐためだ。

バイクで現れた警官

2019年1月3日の出来事か

ら始める。その日の午後2時ごろ、内野さんは愛知県あま市森南の農業用水路でブラックバス釣りをしていた。用水路は愛知県立美和高校の近くにあり、ブラックバス釣りの人気スポットだ。

内野さんは3年前に精神的な不安から体調を崩し、仕事を辞めて自宅で静養していたが、このところ体調が回復して気分が前向きになり、そろそろ就職活動がんばろうと思いはじめた。この日は